

# 指示代名詞の現場指示の領域

## ——高橋調査法による 2008 年若者のコソアド——

安 部 清 哉

### 一 はじめに

指示代名詞の研究は、その複雑な使用法を解明しつつ、近年、その分析と理論的考察はいっそう深化してきている（金水・田窪 1992 など参照）。その一方で、新たに明らかになってきた問題も増え、また、課題として残されたままの問題も少なくない（その日本語史の歴史的問題と、その類型論的課題については、安部 2009. 3 で取り上げた。また、現場指示の課題については、後述する）。

本稿執筆者（安部）は、安部 2009. 3 において、指示代名詞を取り上げ、日本語が歴史的に 2 分法から 3 分法に移行してきた史的背景を明らかにする上では、近隣言語との比較研究も必要であること（比較言語学的、類型論的、対照言語学的いずれにせよ）、また、日本語史における 2 分法から 3 分法への変化の背景には、近隣言語の 3 分法の間接直接の影響（ないし、より古い段階としては基層的言語の影響も含む）も、その可能性として検討しておくべき問題であること、を指摘した。

それらの調査と考察の過程で、指示代名詞の研究には、指示代名詞それ自体の問題のほかに、分析している個々の研究者自身の指示代名詞体系の相違が背景にあることも、議論が複雑になっている一因なのではないか、

ということに改めて思い至った。即ち、語感を異にしているもの同士が、同じ用例に対して、異なった（自身の）言語体系からの解釈を議論していることによる議論のずれの可能性も、指摘できるように思われた。この点は、従来の研究における地域差の指摘（服部四郎）と、世代差の指摘（高橋太郎）を考慮すれば、容易に予想される研究上の陥穽であるものの、研究上の問題として、明確に指摘したものは見られないようであった。

また、実際の指示代名詞の用法自体にも、用法の幅や、許容できる範囲にかなりの相違があるようである。その現代における多様性自体が、十分には把握されていないのではないか、と思われるところもある。その多様さは、地域差なのか世代差・時代差なのか、他の要因による多様さなのか。それとも、そのような一見異なる体系があるようにも見える多様さを持っているものが、指示代名詞というものの特性なのか、という問題もあろう。しかし、そのような個々の日本人の日本語の多様さを明らかにしておくためには、基本的な用法の多様さについて実態を把握し、研究上、共通した認識を持つておく必要があると思われた。

そこで、本稿では、そのような問題も含めて、より具体的に検討できる材料を提示するために、指示代名詞の用法でも、比較的多様さや相違を客観的に把握しやすい、現場指示の用法を事例として取り上げて調査し、上記のような研究上の課題をより具体的なかたちで提示してみることにしたいと思う。

## 二 指示代名詞（現場指示）の研究上の課題

さて、研究者間相互の議論上、看過されている問題を改めて整理すると、特に次のような点が議論や解釈を混乱させる要因になっていないかと懸念される。

①現在における現場指示の指示代名詞の用法それ自体には、——後で確認するように——個人差（地域差・世代差も含め）があることが指摘され

てきている。それにも拘わらず、それらの差異の多様性それ自体が十分解明されておらず、また、その問題点が必ずしも十分には共有されていない（服部四郎氏による地域差の指摘及び高橋太郎氏による世代差の指摘の問題）。

②（語彙・意味や方言などの研究分野において生じている同種の問題のように）分析者が持っている言語体系（指示代名詞の用法の内省や語感）が、その用例の解釈や分析に影響している可能性が十分懸念されるにも拘わらず、分析・考察している研究者自身の指示代名詞体系がどのようなものであるかについてはまったく明示されないままに、考察が展開され、一連の議論が進められてきている面がある（例えば、意味や方言の研究では、必要に応じてであるが、話者の言語経歴や年齢の情報が明示され、用例の分析と比較して考察される）。

まず、①については、例えば、服部四郎 1961. 8 とそれへの反論である宮田幸一 1961. 11 との分析の相違には、出身地による相違が解釈の相違の背景にある可能性が、服部 1968 によって提示されている。また、高橋太郎・鈴木美都代 1982 の結果に対する種々の反応（違和感?）に対して、高橋太郎・中村祐里子 1992 は新たな追加実験を報告した上で、世代差が生じてきていることなどを新たな課題として提示している。

これらの研究からは、指示代名詞の用例や事例に対する異なった分析や解釈の議論の背景に、上記のような生育地や年齢以外に、他の個人差が（も）隠れている可能性がうかがえる。そのような問題がないかどうかを十分に検証して、議論を進めていく必要があることが指摘できよう。

②については、個々の研究者が、例えば、現場指示の次の用法を持つか（妥当と考えるか）持たないかで、現場指示への解釈が（服部と宮田のように）異なってくるであろうし、当然その相違は、文脈指示や観念指示などとも言われる用法の解釈の相違にも、投影しているはずである。

## 指示代名詞の現場指示の領域（安部）

そのような個人差が大きい点を、より客観的にその差が把握されやすい現場指示の用法で確認してみると、安部の調査では、次のような点において、現代語での相違が生じていることが指摘できる。

ア 聞き手に対して、話し手の特に背後のものを、ソ系で指示できるか否か（服部 1961・1968）

イ 話し手と聞き手のおよそ中間領域にあるものにも、ア系で指示できるか否か（高橋・鈴木 1982）

ウ イのア系が現れるのは、話し手と聞き手の間の距離がどのくらいに開いた場合に生じ得るか（高橋・鈴木 1982、高橋・中村 1992、安部 2009）

加えて、後述するように、今回の本稿での実験からは次の点も指摘できる。

エ 中間というより、聞き手により近い領域や、むしろ聞き手近辺と言えるような聞き手側・聞き手寄りのものも、ア系で指示しできるか否か（本稿での調査事例から）

これらは現在わかっているごく一例ということになるのかもしれないが、これらの用法が相違するものが同一の事例を議論しても、当然ながら、その適否や位置付けには、服部・宮田論文で生じたすれ違いのような判断のずれがおのずと生じてしまうことになる。

このように、分析・考察の背後に隠れてしまっている問題を明らかにしていくためには、分析者のもつ指示代名詞の体系を（少なくともその相違が大きく明確である上記のような点については）、論文の注記としてでも明示していく必要があるのではないか（それほどに意見が多様で、かつ、検討される事例が複雑になってきている段階ではないか）、と考えられた。このような問題点の提起は、従来、管見の限りでは（服部・高橋論文を別として）、議論されることはなかったようである。

また、上記の点以外に、現場指示用法においては、今回の実験調査や、それ以外の試験的実験の過程で、以下のような点での問題があることが指摘できる。

a 指示対象物の相対的大きさ（今回の調査では人を指示しているが、鉛筆程度か、人よりも大きなものかなど。「相対的」としたのは、聞き手・話し手の距離、話題にしている空間、比較している事物、周囲にあるものの大きさ、などによっても影響を受けていることが考えられたためである。）

b 聞き手・話し手の置かれている空間の広さ（小さな空間か、体育館かなど。それによって人との距離や指示物の大きさの関係が相対的に変化する。）

c 聞き手・話し手の置かれている空間の開放性（教室のような四方に壁がある空間か、グラウンドなどのように開放されている空間か。dとの関係もあり、天井の高さや有無など、特に上方のみの高さや開放性も含む。）

d 指示物が、聞き手・話し手の視線とほぼ同じ高さにあるか、かなり下方か、上方か（特に、上方ではより距離感を感じることが指摘できる）。

e 聞き手・話し手、それぞれにとって、見える位置にあるものか、見えない位置にあるものか。（情報の認識という点での問題）

f 聞き手が既に認識しているものを指示するか、認識していないものを指示するか。（同上）

このうち、aとbなどはこれまでも指摘されている問題と思われるが、他の点についての議論は、特に現場指示の実際の用例の解釈などでは、必ずしもまだ十分ではないように思われる。

またこれら以外に、同じコ・ソ・アでも、以下の2類の相違が見られることが、指摘できる。

g 指示物が「事物」か「場」かによる相違

これは、今回の実験に前後して行った試験的実験や用例の解釈における相違から帰納的に判断されたものであり、今回の論旨からは離れるので、ここでは、結論的に簡略に説明しておく程度にする（詳しくは機会を改める）。

コノ・ソノ・アノや、コレ・ソレ・アレなどでも特にあまり空間的に大きくはない物体を指し示す場合と、コチラ・ソチラ・アチラや、コノあたり・ソノあたり・アノあたり、ココ・ソコ・アソコ、（あるいは、コッチ・ソッチ・アッチ）などの広い領域（方向も含め）を指す場合の用法とでは、同じコ・ソ・アと言っても、許容度において、この2類を分け得るような相違が認められた。その理由は、いま十分には明らかでないが、上記のような問題とも関わっていて、要するに、相対的大きさや開放性、視線の広がりなどとも関係しているものと考えられる。

この2類は、広い意味で見ると、いわゆる「事物」を指す用法と、空間や場所を指す用法との相違として把握されるから、いわゆる「もの」と「場」との相違として抽象化させて理解することが可能なようである。つまり、それは、久島 2001・2002 において指摘されたような、意味の把握における日本人の「物」と「場」の意味的相違が、この指示代名詞の用法にも投影しているらしい、と解釈できる現象と思われる。（久島では指示代名詞は取り上げられていない。）

もちろん、コ系・ソ系・ア系と言っても、この2分類にとどまらず、そのコ・ソ・ア～の後に続く様々な形態ごとに（コレ、ココ、コチラなど）、微妙な相違を示しているように思われるところもあり、その点ではコ・ソ・ア～の形態の相違ごとに、詳しい分析が必要であると考え（2000年以前の少し古い論文ではコソアのみでまとめられてしまっていた傾向がある）。しかし、上記のような、「物一場所」という相違が特に大きいのではないかと観察されるところがあった。コソアにおける「物一場所」の相違に関する指摘は未だ見出していない。

以上、現場指示における用法の分析上、問題となる点として、使用者によって相違があることが指摘される問題（上記アイウ、及びエ）と、実験や考察の上で注意しておく必要がある問題点を指摘した。

## 二 現場指示の高橋調査法と課題

### 二一(1) 高橋 1982・1992 調査法とその課題

今回は、現時点における指示代名詞の用法の、地域差・世代差を含む個々人の間の相違・多様性を、より客観的・具体的に把握する上で、比較的調査しやすい現場指示の用法を取り上げてみることにしたい。

また、現場指示の用法の多様性は、既に、服部、高橋でその問題が指摘されていることでもあり、より具体的に問題も明らかにされてきている用法なので、最初に取り上げておくのがふさわしいテーマと考えられる。また、その調査方法については、高橋の一連の研究によって、かなり具体的手順を指定した調査法が提示されている点でも、客観的比較上、適当な事例と判断された。

### 二一(2) 高橋調査法の問題

高橋太郎は、高橋・鈴木 1982 と高橋・中村 1992 とにおいて、ほぼ同様に、その現場指示の独自の調査方法を実行し考察している。後者の方が手順の説明が詳しいが、基本的に同じ調査方法であるので、以下、高橋調査法とまとめて呼ぶことにする。

その調査法は、教室を使った現場指示の調査法として工夫されたものであり、独特のものであるが、回収した回答を距離によってまとめて作図しやすいという点でも優れている。論文を読んだだけでは気付けなかったが、今回、実際に実験してみて感じられた課題は、以下の点である。

- ① 話し手（着座した回答者）の指示物（立った学生）への体の向き  
高橋調査法では、その手順は詳しく解説されているが、教室内で回答す

ときの、回答者の体の向きについては、特に言及がない。教室内で、話し手である各学生が、机に向って椅子に座った状態で回答を記入することになるが、聞き手（座席位置 31 番、34 番の 2 種類）と、指示された学生（各座席番号）とは、さまざまな体の向きで回答することになる。「話し手（回答者）は、聞き手に対して、常に体を正面に向けた状態で回答する。」というように、一律に指示すれば体の向きを統一できたであろう。

今回の実験では（高橋・中村 1992 では特に触れられていなかったのだが）、聞き手の後方に位置する話し手が聞き手の顔を直接に見て発話出来るよう、聞き手は座席上で 360 度回転するような方法をとった。

しかしながら、この方法では聞き手の前方や横側に位置する話し手に配慮が足りていないということが明らかとなった。つまり聞き手の前方や横側に位置する話し手は、自分たちで体を動かして聞き手を見なければならなかったという点に問題があったのである。実際には、教室の正面に体を向けたまま、首だけ横や後ろの方の指示物（学生）の方を向いて確認し、回答を記入するということがおのずと多くなっていく。極端に言えば、聞き手に対して正面を向いて回答した場合と、自分の側面を意識したり、やや後方への意識が入りこんだ回答が、混在する結果になっていないか、ということが懸念された。われわれの別の試験的実験では、同じ距離でも、側面や背後へはやや距離感を感じやすいという傾向が認められた（付言すれば、周囲の距離感に左右差が見られ、利き手の方向は手が届きやすいせいもあるためか、反対側よりも近く意識されるという傾向が別の実験では認められた）。

本調査では話し手と聞き手の距離ごとに区分したが、それらは単に教室内での両者の距離なのであって、対面した場面での距離による違いを表した調査としては不十分な部分がある。次回の調査では聞き手の正面に位置するよう椅子の向きをそれぞれ変える必要があり、そのような場合においても本調査のような結果が出るのかを分析していかねばならないと思われる。



## ② 話し手（回答者）の指示物への視線の上下方向

高橋調査法では、質問する聞き手が立ち、指示される学生は立って番号札を上に掲げ、話し手（回答者）に当たる多くの学生は、座った状態で回答を記入することになっている。つまり、話し手の視線は、上目遣いになる。我々の別の試験的実験では、視線が水平ないし下方よりも上方の場合ではやや距離を感じる、という内省が多くの学生から得られている。座っている学生が、立っている学生を、さらに上に掲げた番号も意識しながら回答するということが、やや遠い距離を感じさせ、ア系の回答を増やす方向に影響しないか、ということが懸念された。（高橋や中村祐里子 1990 ではア系の範囲が広いことが問題となっていた）。これは、聞き手と話し手の距離によっても異なり、近い場合は上目遣いでも、遠くなれば上下方向の距離間はさほどの影響もないであろう。また、教室が広ければ、より距離のある回答者には影響があまりないかもしれない。

## ③ 教室の広さ

演習室程度の小規模や中規模の教室と、100人を越えるような大講義室とでは、空間的な距離感が多少異なってくることが指摘できる。高橋の2つの調査では、実際に使用した、広さのやや異なる教室がそれぞれ記述されていて、小教室と中教室程度である。特に、規模の制約や条件は書かれていない（体育館で同じ数の机と椅子を配置してやってもよいのかなど）。例えば、同じ人数の回答者であっても、大教室の中央部分で、一定範囲で机と椅子を使用してやった場合、回答者がまったく同じであっても、果たして、小規模教室でやった場合と、同じ結果になるかどうか、ということが懸念される。そこまでの精度を求めているのかもしれないが、今後、地域差や世代差、年代的推移を細かく比較していくようになるならば、この点でも条件の統一が必要になってこよう（我々の試験的実験でも、学生からは教室規模での相違の可能性を指摘する意見があった）。

## ④ 聞き手の座席の位置（吉田早織・まとめ担当）

高橋・中村 1992 の調査法では、聞き手が教室の座席番号 31 番と 34 番

に居る場合の実験を行っている。座席番号 31 番は教室の最前列（のほぼ真ん中）、一方の、座席番号 34 番は教室のほぼ中央の座席である。座席番号 34 番が聞き手の場合は、教室中央であるため、話し手（各学生）から見て指示物（番号の人物）が、聞き手=34 番の前後左右に位置しているので、聞き手の周囲に対してどの指示詞が使われるか、ほぼ万遍なく指示物を設定することが出来る。しかし、座席番号 31 番は、教室の最前列である。つまり、31 番にいる聞き手の四方にまんべんなく指示物を位置させることが出来ないのである。

聞き手座席 31 番（三一(3)―1）の距離別分布図を見ると、例えば図 3―②（p103）（i）話し手から聞き手までの距離：0.5 m 以上～1 m 未満の場合、話し手は聞き手の隣席である座席番号 41 に座っていたため、両者の側面は教室の前方（教卓側）であり指示物を位置させることが出来なかったため、回答が得られなかった。また、聞き手の後ろに指示物を設置した事例が十分に無いことも分かる。

距離に拘わらず聞き手座席 31 番の全分布図について言えることなのだが、(iii)、(vi)～(xii) は特に聞き手の背面に指示物が位置した事例が不足している。それと同様に話し手の後方に指示物がある事例も、話し手・聞き手間の距離が長くなればなる程不足し、分布図において見られたとしても大部分がコ系・ソ系までであったり、コ系までであったりする。

以上の問題点を踏まえて、実験においては教室の端の座席に聞き手を位置させるだけでなく、指示物を四方に位置させることが出来る位置（例えば座席番号 53 番など）に聞き手を設定するのがよいであろう。あるいは、聞き手の、そのような配置が可能となるような、より広い教室で、大人数で実験を行う必要があると思われる。

##### ⑤ 指示物（指示する座席番号）（吉田早織・まとめ担当）

もうひとつの問題点は指示物の設定（指示する座席の番号）である。これも高橋調査法の結果と分布図を比較できるようにすることを優先させたため、座席番号 44, 37, 61, 65, 14, 33, 64, 17, 51, 67, 35, 22, 55、

13、46、11、42の順で指示物を設定した実験を行った。三一(3)―2の②でも少し触れたが、例えば聞き手座席31番距離別分布図(viii)を見ると、話し手・聞き手の間の、聞き手を囲むようにして見られる☆[アノ]と聞き手の間には空白が現れていることが分かる。これは、☆[アノ]と聞き手の間の位置に指示物を設定した実験をしていないためである。

この点から、どの位置に指示物を設定するか、つまり、どの座席番号をどのくらいの密度で指定するのがより良いか、という点が検討課題であることがわかる。少なくとも話し手・聞き手の前後左右の座席番号を設定するようにして、実験を行っておく方が、分布のムラが解消されるであろうと思われる。つまり、高橋調査法の座席番号にはとらわれず、より距離的密度の高い実験を試行した方が、より距離毎の使い分けを明らかにする上で、精度の細かい結果を得ることができると思われた。

以上、①の点は、今回の調査でも、回答の均質性に多少影響している可能性がある。また、②の点を懸念して、今回の調査では、番号札を上に掲げることは行わなかった。

### 三 2008年の若者の現場指示用法——高橋調査法による

#### 三一(1) 調査方法——高橋・中村1992

今回は、高橋・中村1992の調査法に基本的に従って行った。高橋調査法については、高橋・鈴木1982と高橋・中村1992があるが、後者の方が解説が詳しく、かつ、前者からの経験が踏まえられていると考えられたので、基本的に後者の手順に従って行った。異なる点は、次の程度である。

ア 教室の広さの多少の相違——図1のような机の配置をとり、左右は、一人一人が通れるスペースがある程度である。なお、教室後方には、縦に机3列分の空間があったが、それらの机は後ろ壁側に寄せて行った。なお、教室の規模は、高橋・鈴木1982と高橋・中村1992でも異なっており、絶対的な条件ではない(図2に高橋・中村1992の教室図と調査票を示した)。

図1 調査記録用紙

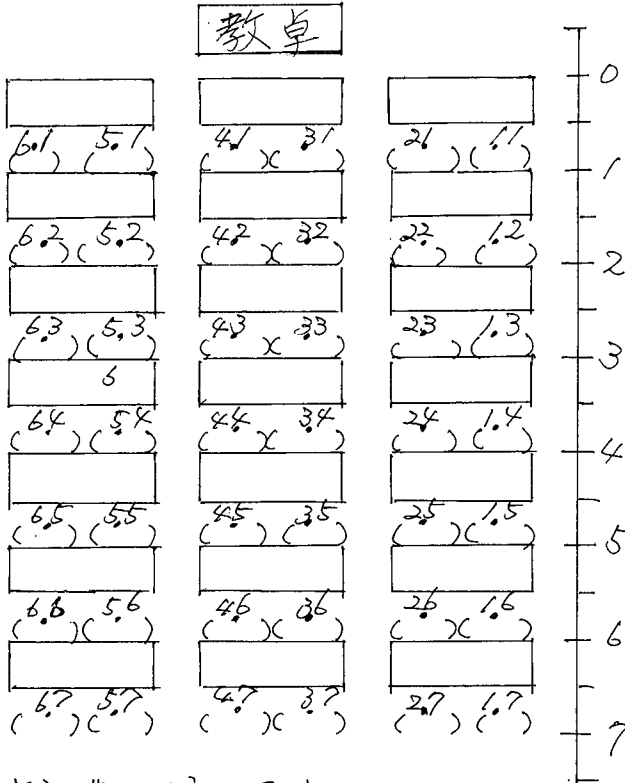
コソアド調査

2008.7  
日本橋

A

Q ( )番はどの人ですか?

A ( )番は(コ・ソ・アド)人です  
(聞かれた座席の( )に必ず紙かきを入れる).

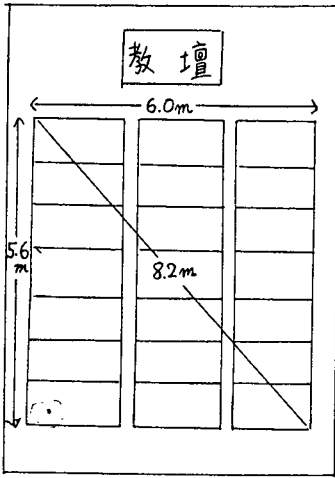


年齢満( )才 男・女  
出身地( ) 生育地( ) →

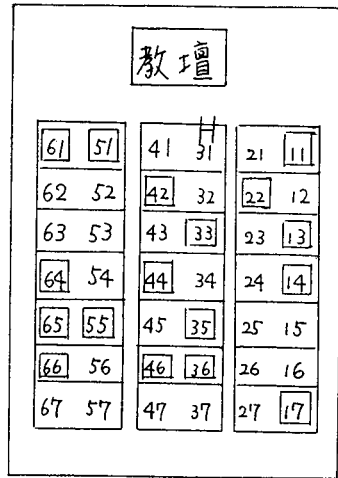
開手 (31・34) 読手(あなご)の座番( )  
○印 【開手と読手との距離 ( , m)】

図2 高橋・中村 1992 「1991、わかものコソアド」

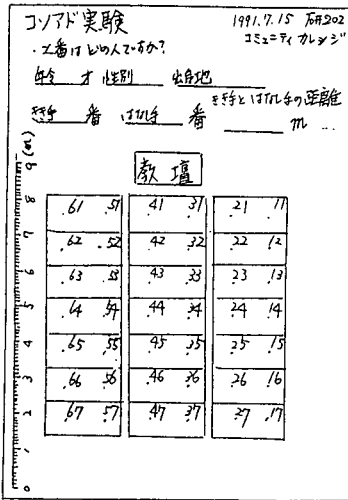
(図 1.a)



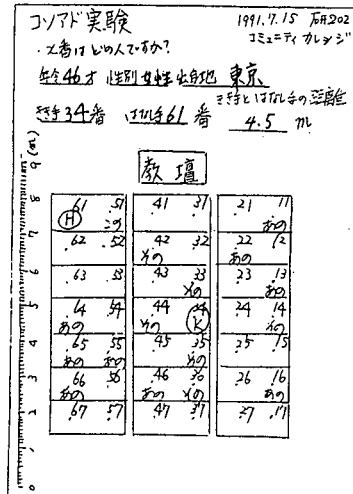
(図 1.b)



(図 2.a)



(図 2.b)



イ 高橋調査での手順では、指示対象となる各番号の位置の学生は（聞き手・話し手ではなく指示される学生）、立って番号の紙を上方に掲げることになっているが、今回は、ただ番号を胸の位置に持って立つだけで行った（上方に掲げると視線が上方を意識しやすくなり、ア系の現れやすさに影響することが懸念されたため）。（回答者の出身は付記①参照。）

なお、紙幅の都合上、その手順はここでは掲載を略するので、高橋論文を参照されたい。以下、実験結果のコソアの用法を、聞き手の立つ位置（番号31・34）毎に図示し、それぞれについて、聞き手・話し手間の距離毎に分けたコソアの分布傾向を、簡単に報告していくこととする。

### 三一(2) 聞き手話し手の距離が比較的近い場合（聞き手「34」番）（執筆担当：上原和実）

#### 図3—①聞き手34番（8枚）参照

聞き手「34」番、回答者37人（留学生・外国人を除く）、図1の右側のメモリ1つが50cm、2つで1mを表す（原図上で2cm）。記号は、H：話し手、K：聞き手、○：コノ、■：ソノ、☆：アノ。

聞き手「みなさん、○番はどの人ですか」

話し手「○○さん、○番は（コノ・ソノ・アノ）人です」

#### 三一(2)—1 聞き手34番での距離別分布図の解説

- (i) 話し手から聞き手までの距離：0.5 m 以上～1 m 未満（1人）
- ・話し手を中心に半径およそ1.2 mの円を描くと、その円の内側にコ系がでている。話し手と聞き手のすぐまわりにコ系が見られる。
  - ・そのコ系の領域の外側に、聞き手を中心として半径をおよそ1.9 mの円を描くとその円の外側を囲むようにア系がでている。話し手と聞き手の各々のまわりの外側にア系が見られる。
  - ・ソ系は使われない図となった。
- (ii) 話し手から聞き手までの距離：1 m 以上～1.5 m 未満（5人）

- ・話し手を中心に半径およそ 1.7 m の円を描くと、その円の内側にコ系がでている。話し手と聞き手のすぐまわりにコ系が使われているが、話し手のまわりに見られる。
- ・話し手が聞き手と向かい合ったとき、話し手からみてコ系領域の外側のやや左右後方から前方の範囲に広がってソ系とア系が混在してでている。
- ・ア系は、ソ系とア系が混在した領域の外側と、話し手のコ系領域の外側後方に見られる。

(iii) 話し手から聞き手までの距離：1.5 m 以上～2 m 未満（2 人）

- ・話し手を中心に半径およそ 1.7 m の円を描くと、円の内側にコ系がでている。話し手と聞き手のすぐまわりに見られるが、主に話し手のまわりに集まって見られる。
- ・そのコ系の領域の外側に、話し手から左右前方の聞き手よりの領域にソ系が見られる。
- ・そのソ系の領域の外側にほぼ聞き手より後方にソ系とア系が混在している領域が見られる。
- ・ア系は、ソ系とア系が混在する領域の外側である聞き手後方に、多く広がっている。

(iv) 話し手から聞き手までの距離：2 m 以上～2.5 m 未満（10 人）

- ・話し手を中心に半径およそ 1.6 m の円を描くと円の内側にコ系がでている。話し手のまわりに見られる。
- ・さらに、半径およそ 2.3 m の円を描くと、コ系の領域を除いたその内側には、コ系とソ系が混在してでている。
- ・話し手から聞き手に向かっておよそ 4.5 m の地点から半径 6.8 m の円を描くとその円の内側には、コ系の領域とコ系・ソ系が混在した領域も入るが、その領域を除いた部分にソ系とア系が混在して見られる。
- ・その円の外側にア系がでているのだが、その範囲は、話し手と聞き手の距離のおよそ中間地点から聞き手側後方にかけて広がって見られる。
- ・ソ系は、聞き手を中心とした半径およそ 1.3 m の円に集まって使われ、

指示代名詞の現場指示の領域（安部）

さらに、話し手と聞き手のおよそ中心地点から聞き手に向かった話し手の左右にも広がって見られる。

(v) 話し手から聞き手までの距離：2.5 m 以上～3 m 未満（6人）

- ・話し手を中心に半径およそ 1.7 m の円を描くと、その円の内側はコ系がでている。そのコ系は、話し手のまわりに見られる。
- ・コ系の領域の外側で、話し手から聞き手に向かってやや左右前方から聞き手の話し手側前方の左右くらいまでの間に、コ系とソ系が混在して見られる。
- ・話し手を中心として半径およそ 4.9 m の円を描いたとき、コ系の領域、コ系・ソ系の混在した領域を除いた内部にはソ系とア系が混在してでている。その外側はア系のみとなる。
- ・ソ系は、聞き手のまわりに見られる。
- ・ア系は、聞き手のまわりに使われたソ系の領域の外側に広がっている。

(vi) 話し手から聞き手までの距離：3 m 以上～3.5 m 未満（7人）

- ・話し手を中心に半径およそ 2.3 m の円を描くと、その円の内側はコ系がでている。話し手のまわりに使われているのだが、この図では話し手の左右やや後方から聞き手に向かう範囲での領域にコ系が見られる。
- ・ソ系は、コ系の領域の外側にでているのであるが、その範囲は、話し手と聞き手を結んだ線上の話し手からの距離 2.2 m 地点を中心とした半径およそ 2.2 m の円を描くと、その内側の聞き手のまわりに主に見られた。
- ・ソ系の領域とした円と同じ地点を中心に半径およそ 3 m の円を描くとその領域にはソ系とア系が混在してでている。
- ・ア系は、ソ系・ア系の領域の外側にでている。その外側とは、聞き手の真後ろを含めた話し手から見える範囲の外側に広がってでている。

(vii) 話し手から聞き手までの距離：3.5 m 以上～4 m 未満（4人）

- ・話し手を中心に半径およそ 2.25 m の円を描くと内側にコ系がでている。ただし、コ系の範囲は、話し手の左右やや後方から聞き手に向かう範囲



で見られる。

- ・その円の外側に、聞き手のまわりにソ系がでている。
- ・ソ系の外側の領域で、聞き手のほぼ真後ろ辺りの領域に、ソ系とア系が混在してでている。

(Ⅷ) 話し手から聞き手までの距離：4 m 以上～4.5 m 未満（2人）

- ・話し手と聞き手を結んだ線の話し手から聞き手に向かって2.9 m の地点を中心に半径およそ2.1 m の円を描くと主にその内側にソ系がでている。
- ・ソ系の領域とする円の中心からおよそ3.1 m の距離を半径とした円を描くとソ系とア系が混在している。その領域の外側で、話し手から聞き手に向かって見える範囲、そして、聞き手の左右後方にア系が広がっている。

### 三一(2)ー2 聞き手34番のまとめ

①話し手と聞き手が接近しているとき、両者のすぐまわりにコ系が使われるのは、話し手と聞き手の距離が3.5 m 未満までのときに見られた。しかし、話し手と聞き手の距離が1.5 m 以上離れると、話し手を中心とした周囲にコ系が使われていた。

話し手と聞き手の距離が1 m 以上1.5 m 未満であれば、コ系の外側は、ソ系とア系が混在した層（＝領域）、その外側にア系の層ができた。2 m 以上3 m 未満であればコ系の外側にコ系とソ系の混在した層、その外側にソ系の層、その外側にソ系とア系が混在した層、その外側にア系の層ができた。この距離くらいから、コ系とソ系の混在した層、ソ系とア系の別々の領域ができた。また、コ系の層の外側にソ系の層、その外側にソ系とア系の混在した層、その外側にア系というような層もできた。距離が3 m 以上になると、混在していたコ系とソ系が、コ系の層、ソ系の層と混在しないような分布であらわれた。

②話し手と聞き手の距離が1.5 m 以上離れると、話し手のなわばりが

## 指示代名詞の現場指示の領域（安部）

コ系になり、聞き手のなわばりがソ系になるのだが、特に話し手と聞き手の距離が2 m 以上になるとはっきりその傾向が見られた。

③ア系は、話し手と聞き手から同方向、それに近い方向に見えるものをさすときにも使われ、話し手と聞き手の距離が離れるにつれ、主に聞き手後方の広い範囲にわたってさすときに使われていた。

④話し手と聞き手の距離が離れるにしたがって、聞き手周辺のソ系のでるところは、話し手のコ系のでるなわばりより広がっている。コ系の外側のソ系も、聞き手のなわばりの中にあるようになるのは、話し手と聞き手の距離が2 m 以上になったときに見られた。

⑤ア系は、話し手と聞き手のなわばりには使われず、なわばりから離れたソ系の領域の外側に使われていた。

⑥話し手と聞き手の距離が1 m 以上から3 m 未満まで離れているときは、ソ系は聞き手のなわばりと、話し手と聞き手の間のコ系領域の外側に使われていた。距離が3 m 以上になっていくと、聞き手のなわばりにソ系が使われていた。

⑦話し手と聞き手の距離が離れるにつれて、コ系の領域も話し手を中心としたなわばりが少しずつ広がるが、話し手のまわり約2 m 強までのところがコ系であった。

⑧コ系の層のまわりをソ系の層がとりまくが、その層の間にコ系とソ系とが混在する領域が、話し手と聞き手の距離が2 m 以上のときに見られた。

⑨ソ系の層は、聞き手がはなれるにしたがって、聞き手の位置のほうへ、のびていった。

⑩聞き手が話し手のそばにいるときは、聞き手の位置は、コ系の層の中にあるが、聞き手と話し手の距離が2 m 以上になるとコ系の層の外になった。

⑪ソ系の層の外側をア系の層がとりまくが、その層の領域にソ系とア系が混在している層が見られた。

三一(3) 聞き手話し手の距離がややある場合（聞き手「31」番）（執筆担当：吉田早織）

図3-②聞き手31番（13枚）参照

聞き手「31」番、回答者37人（留学生・外国人を除く）、図1のメモリ1つが50cm、2つで1mを表す（原図上で2cm）。記号は、H：話し手、K：聞き手、○：コノ、■：ソノ、☆：アノ。

聞き手「みなさん、○番はどの人ですか」

話し手「○○さん、○番は（コノ・ソノ・アノ）人です」

### 三一(3)-1 聞き手31番での距離別分布図の解説

#### (i) 話し手から聞き手まで距離：0.5 m 以上～1 m 未満（1人）

- ・話し手と聞き手の距離が非常に近く（1つの机に並んでいる41番）両者が教室の一番前の席に居たため、話し手から見て右方向の対象しか出てこなかった。（つまり話し手から見て左側は教卓で、指し示す対象物がそちらに現れることはなかった）
- ・話し手を中心として、半径ほぼ1.4 mの円の内側にコ系が見られる。そしてその外側にソ系が広がり（話し手を中心として、半径2.1 mの内側）、ア系は更にその外側に広がっている。
- ・話し手の後ろ側（真後ろ）にソ系が見られる。（コ系が出る範囲よりも遠くに指示対象があった場合）
- ・聞き手真後ろ（聞き手から2.1 m）でソ系が見られる。

#### (ii) 話し手と聞き手までの距離：1 m 以上～1.5 m 未満（3人）

- ・話し手を中心とした、半径がほぼ2.1 mの円の内側にコ系が見られる。
- ・半径ほぼ3.1 mの円内で、（話し手と聞き手を結んだ線を0度として）話し手を中心に上110度、下120度に、ソ系見られる。（後述の2例を

## 指示代名詞の現場指示の領域（安部）

除く）そしてその外側にア系が広がっている。指示対象の方向によっては、コ系もしくはア系しか出にくいと言う事が伺える。

- ・話し手の後方（左側、真後ろ）にソ系が2例現れている。しかしながらそこは同時にア系も使われる範囲となっている。
- ・聞き手の真後ろ（聞き手から2.3 m、3.1 m）ではア系が見られた。

### (iii) 話し手と聞き手までの距離：1.5 m 以上～2 m 未満（1人）

- ・話し手と聞き手を結んだ線を0度として、話し手を中心に上150度にソ系、ア系が広がっている。話し手から見て左方向にしか指示対象がなかった為、このような図になった。
- ・話し手を中心に半径ほぼ1.2 m にコ系、半径2.2 m にソ系、更にその外側にア系が広がっている。
- ・この場合にも話し手の後方（図の左側）にソ系が見られる。

### (iv) 話し手と聞き手までの距離：2 m 以上～2.5 m 未満（5人）

- ・話し手を中心に半径1.5 m にコ系が見られる。
- ・半径ほぼ3 m の円内で、（話し手と聞き手を結んだ線を0度として）話し手を中心に上120度、下70度に、ソ系が多く見られる。上120度を超えた範囲にも2例、ソ系がある。
- ・話し手後方（左側）にソ系が見られる。
- ・ア系はコ系・ソ系の外側、或いはコ系の外側に現れている。
- ・聞き手の真後ろ（聞き手から1.9 m、2.7 m）ではア系が見られる。

### (v) 話し手と聞き手までの距離：2.5 m 以上～3 m 未満（3人）

- ・話し手を中心に半径2.1 m にコ系が見られる。
- ・ソ系は、半径ほぼ3.6 m の円内で、（話し手と聞き手を結んだ線を0度として）話し手を中心に上90度、下90度に見られる。
- ・聞き手の真後ろ（聞き手から2.1 m）にソ系が見られる。

- ・ア系はコ系・ソ系の外側、或いはコ系の外側に現れている。

(vi) 話し手と聞き手の距離：3 m 以上～3.5 m 未満（3人）

- ・コ系は、話し手を中心に半径 1.7 m に広がる。
- ・ソ系は、半径 3 m の円内で、（話し手と聞き手を結んだ線を 0 度として）話し手を中心に上 115 度、下 90 度に見られる。上 115 度を越えた範囲にも 3 例、ソ系がある。
- ・話し手の後方（左側、真後ろ）にソ系が見られる。しかしながらそこではア系も見られ、数的にもア系を使う事の方が多い。
- ・ア系はコ系・ソ系の外側、或いはコ系の外側に現れている。しかし、ア系の分布範囲内にソ系が見られる場合もある。
- ・話し手と聞き手の間で話し手から見た左側、聞き手寄りに、ア系が見られる。向かい合った際、聞き手よりに指示対象があった場合ソ系を用いることが多いが、ここではア系の使用が 1 例見つかった。

(vii) 話し手と聞き手の距離：3.5 m 以上～4 m 未満（3人）

- ・話し手から半径 2.4 m にコ系が広がる。しかし半径 2.4 m でも聞き手に近い方ではソ系、ア系が見られる。
- ・ソ系は、半径ほぼ 3.6 m の円内で、（話し手と聞き手を結んだ線を 0 度として）話し手を中心に上 95 度、下 60 度に見られる。しかしソ系の領域といってもきっちりと線引きできるわけではなく、ア系の分布もいくらか見られる。
- ・話し手の後部にはソ系が見られず、コ系、ア系が分布している。
- ・ア系はコ系・ソ系の外側、或いはコ系の外側に現れている。
- ・話し手と聞き手の間の、やや聞き手よりにア系が見られる。

(viii) 話し手と聞き手の距離：4 m 以上～4.5 m 未満（4人）

- ・話し手から半径ほぼ 1.2 m にコ系が広がっている。

指示代名詞の現場指示の領域（安部）

- ・ソ系は、半径ほぼ3.1 mの円内で（話し手と聞き手を結んだ線を0度として）話し手を中心に上100度、下95度に多く見られる。
- ・例外として、話し手の後方（右側）にソ系が2例見られる。
- ・ア系はコ系・ソ系の外側、或いはコ系の外側に現れている。
- ・話し手から見て、聞き手寄りの右側、左側にア系が見られる。聞き手の領域であるので主にソ系が使われる領域だが、右側に3例、左側に3例が見られる。

(ix) 話し手と聞き手の距離：4.5 m 以上～5 m 未満（3人）

- ・話し手から半径ほぼ1.4 mの円内で、上120度、下60度にコ系が見られる。
- ・ソ系は半径ほぼ3.4 mの円内で（話し手と聞き手を結んだ線を0度として）話し手を中心に上110度、下105度に多く見られる。
- ・話し手の後方（真後ろ、右側、左側）にもソ系が見られる。
- ・ア系はコ系・ソ系の外側にある。
- ・話し手から見て、聞き手寄りの右側、左側、正面にア系が見られる。聞き手の領域であるので主にソ系が使われる領域だが、右側に1例、左側に2例、正面に1例が見られる。

(x) 話し手と聞き手の距離；5 m 以上～5.5 m 未満（5人）

- ・コ系は話し手を中心に半径2.1 mに見られる。
- ・ソ系は、話し手と聞き手を結んだ線を0度として、話し手を中心に上110度、下120度に分布している。分布はコ系の外側なのだが、ア系も共に見られ、混合して使用されている。
- ・話し手と聞き手が教室の一番前と後ろから2番目に位置していたため、話し手の後方ではコ系しか現れなかった。
- ・話し手から見て、聞き手寄りの右側、左側にア系が見られる。聞き手の領域であるので主にソ系が使われる領域だが、右側に3例、左側に3例

が見られる。

(xi) 話し手と聞き手の距離：5.5 m 以上～6 m 未満（1人）

- ・話し手と聞き手を結んだ線を0度として、話し手を中心に上30度、下80度にコ系、ソ系、ア系の多くが広がっている。話し手から見て聞き手方向にしか指示対象がなかった（話し手の左側や後方などに指示対象がなかった）ため、このような図になった。
- ・話し手を中心に半径1.5 mにコ系、半径ほぼ3.1 mにソ系、外側にア系が広がっている。
- ・聞き手に近い領域はソ系よりもむしろア系で現われている。（話者は静岡県湖西市生育。「聞き手の所有物であることがはっきりしているものなら、ソノを使っただろう。」とのことであった。）

(xii) 話し手と聞き手の距離：6 m 以上～6.5 m 未満（4人）

- ・話し手と聞き手が教室の一番前と一番後ろに位置していたため、話し手の後方、聞き手の後方が指示対象になることがなかったのでこのような図になった。
- ・コ系は半径2.5 mの円内で（話し手と聞き手を結んだ線を0度として）話し手を中心に上115度、下95度に広がっている。
- ・ソ系はコ系の外側に位置し、聞き手の近くまで横長の形で広がっている。ただしソ系の領域内にア系の分布も見られる。
- ・ア系はソ系の外側に広がっている。
- ・話し手から見て、聞き手寄りの右側、左側にア系が見られる。聞き手の領域であるので主にソ系が使われる領域だが、右側に1例、左側に2例が見られる。
- ・話し手と聞き手の中間にもア系が1例見られる。

(xiii) 話し手と聞き手の距離：6.5 m 以上～7 m 未満（1人）

- ・話し手と聞き手を結んだ線を0度として、話し手を中心に上30度、下65度にソ系、ア系が広がっている。話し手から見て聞き手方向にしか指示対象がなかった（聞き手の右側、左側や後方などに指示対象がなかった）ため、このような図になった。
- ・話し手を中心に半径ほぼ2.7 mにソ系が広がっており、その外側にア系が広がっている。
- ・この図ではソ系とア系しか無く、コ系が見られない。聞き手に関係なく話し手からの距離によってソ系・ア系を使い分けているかのようである。6.5 m 以上～7 m 未満という本実験で一番遠い距離だから出た結果なのか、話し手の語感の問題なのか、それとも実験が正しく行われなかったからなのか（話し手が聞き手の存在を忘れてしまった、など）、更に追究する必要があるだろう（四章の①補足説明と図3—②—(xi)解説参照）。

三一(3)—2 聞き手31番のまとめ

① 話し手の後ろはア系が強い

背面にソ系が出る話し手も居たが、全員が言うというわけではなく、人によって異なっていた。背面にソ系がでる場合を話し手と聞き手の距離ごとに確認してみると、以下のものであった。（同一人物が後方右側と後方左側をそれぞれ「ソノ」と答えていることも考えられたので、各図中の■[ソノ]の個数と人数を示した。）

- (i) に■1つ：1人
- (ii) に■2つ：1人
- (iii) に■1つ：1人
- (iv) に■2つ：1人
- (vi) に■3つ：2人
- (vii) に■2つ：1人
- (ix) に■3つ：3人



後方にソ系が出ると回答した10人の出身地に偏りは見られない。後方をア系で表す回答者の方が多いが、ソ系も全体の約4分の1を占めることから、特殊な回答であるとは言いにくい。

## ② 話し手と聞き手の間にア系が見られる

話し手と聞き手の間は、一般的にはソ系で示されるとされる。しかしながら本調査では、両者がある一定以上の距離を保った場合にア系が出てくることが確認された。両者の距離が3 m 以上～3.5 m 未満の、図 (vi) でア系が見え始め、6.5 m 以上～7 m 未満の図 (xii) までのすべての距離区分で見られた。

これに関しては、聞き手がいようがまいが自分中心の絶対的な距離感によって「コ」、「ソ」、「ア」を使っているという意見も得られた。確かにそのような使い分けが若い世代を中心に増えてきたのかもしれないが、もう一つの可能性として、話し手は聞き手の領域を意識しているのではないか、ということが考えられる。特に (viii) 4 m 以上～4.5 m 未満、(ix) 4.5 m 以上～5 m 未満、(x) 5 m 以上～5.5 m 未満の3図に顕著なのだが、☆ [アノ] が見られるのはいずれも聞き手からある程度の距離を置いた位置（聞き手から1 m～2 m 離れた位置）である。そして☆ [アノ] は聞き手を中心にしてその距離を半径とした円の外側に広がっていることがこの3図から分かる。今回の調査からは、これらの場合の、聞き手を中心とした半径1 m～2 m の円内の回答が少ないため分からなかったが、推測するに、聞き手の領域を示す [ソノ] が使われているものと思われる。そしてそれ以上に離れた位置、つまり半径1 m～2 m の円の外は聞き手の領域 [ソノ] の外側 = [アノ] の領域、と話し手は捉えたのではないだろうか。

本調査で☆ [アノ] が確認された位置よりもより聞き手に近い位置をどのような指示代名詞で指し示すか調査し、更にア系に関して詳しく見ていく必要がある。

③ 聞き手の約 2 m 後方までがソ系、2 m 以上後方はア系

聞き手の背面にあるものを指し示す場合にどのように表現するのかは、(i) 0.5 m 以上～1 m 未満、(ii) 1 m 以上～1.5 m 未満、(iv) 2 m 以上～2.5 m 未満、(v) 2.5 m 以上～3 m 未満の 4 図に表れている。4 図によると、(i) 聞き手から 2.1 m 後方は■ [ソノ]、(ii) 聞き手から 2.3 m 後方と 3.1 m 後方は☆ [アノ]、(iv) 聞き手から 1.9 m 後方と 2.7 m 後方は☆ [アノ]、(v) 聞き手から 2.1 m 後方が■ [ソノ] という回答が見られる。これらから、聞き手の約 2 m 後方までがソ系、2 m 以上後方がア系で指し示しやすいという傾向が見えてくる。およそ 2 m といった距離区分があるだろうと考えられることに加えて、聞き手が手を伸ばして置いてあるものを取り出すことができる距離を「ソノ」で表し、取ることが出来なさそうな距離を「アノ」で表すように思う、といった回答も得られた。本調査では調査の方法上、聞き手の後方を指し示す場合の回答を多く集めることが出来なかった。次の調査ではもう少し大きな空間・大人数の調査対象者を用いて、話し手・聞き手から見てどのような方向にも対応した調査を行う必要がある。また両者の距離によって聞き手の後ろを指し示す指示語が異なってくるのかにも注目したい。

#### 四 むすび

本稿では、指示代名詞の問題として、特に現場指示に限定して、次の問題を取り上げた。

- ①高橋調査法に従って、2008 年における 20 歳前後（18、19 歳）の若者における現場指示の用法を報告した。
- ②高橋調査法における問題を指摘した。
- ③現場指示用法における、使用者による相違点について、従来の地域差、世代差の指摘を踏まえ、高橋調査法と同じような、比較的単純な場面を想定した場合（一定空間で事物を直接指示する場合など）に認められるいく

図 3-① 間手 34 番 (i)  
(i) 0.5 m 以上～1 m 未満 (1 人)

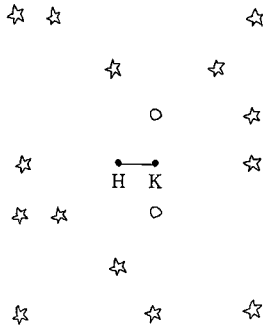
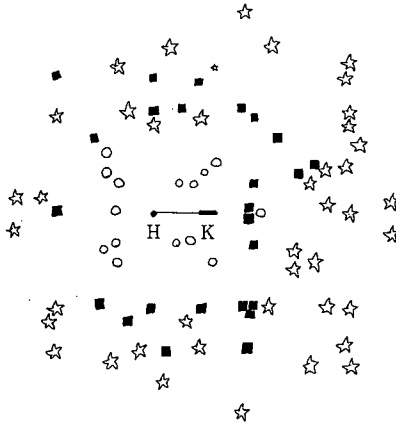


図 3-① 間手 34 番 (ii)  
(ii) 1 m 以上～1.5 m 未満 (5 人)



指示代名詞の現場指示の領域 (安部)

図 3-① 聞手 34 番 (iii)  
(iii) 1.5 m 以上~2 m 未満 (2 人)

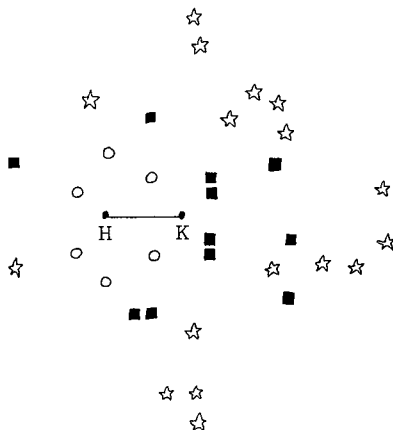


図 3-① 聞手 34 番 (iv)  
(iv) 2 m 以上~2.5 m 未満 (10 人)

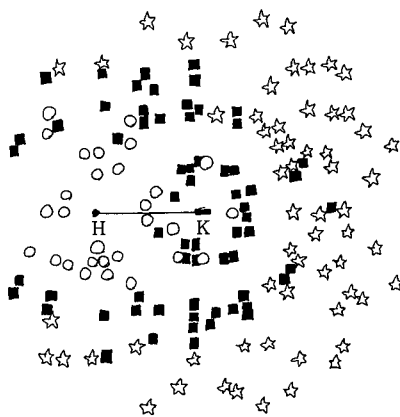


図 3-① 間手 34 番 (v)  
(v) 2.5 m 以上～3 m 未満 (6 人)

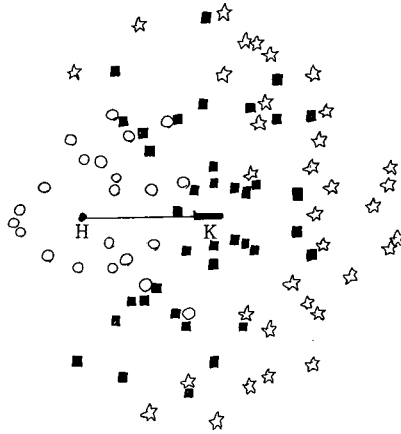
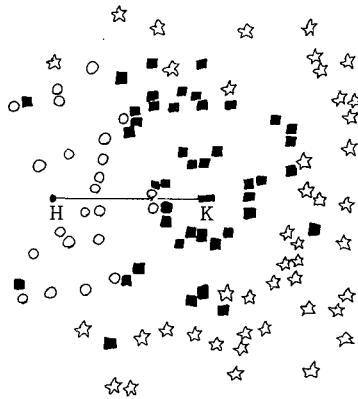
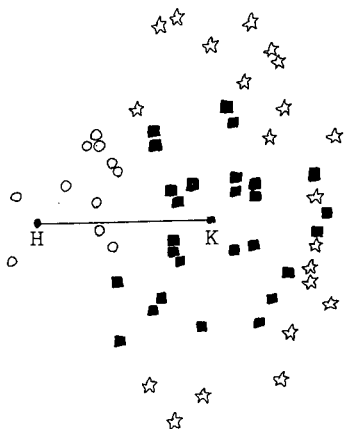


図 3-① 間手 34 番 (vi)  
(vi) 3 m 以上～3.5 m 未満 (7 人)



指示代名詞の現場指示の領域（安部）

図 3-① 聞手 34 番 (vii)  
(vii) 3.5 m 以上～4 m 未満 (4 人)



---

図 3-① 聞手 34 番 (viii)  
(viii) 4 m 以上～4.5 m 未満 (2 人)

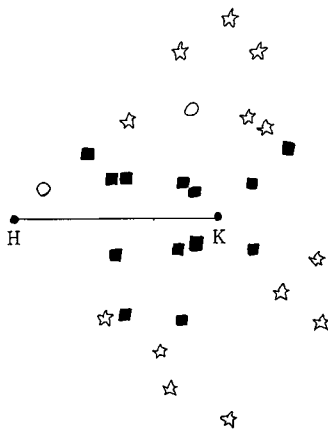


図 3-② 聞手 31 番 (i)  
 (i) 0.5 m 以上 1 m 未満 1 人

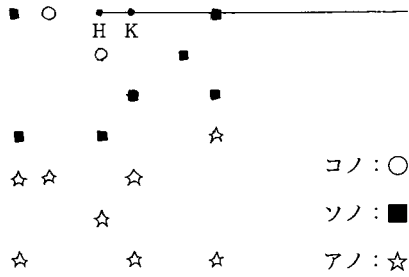
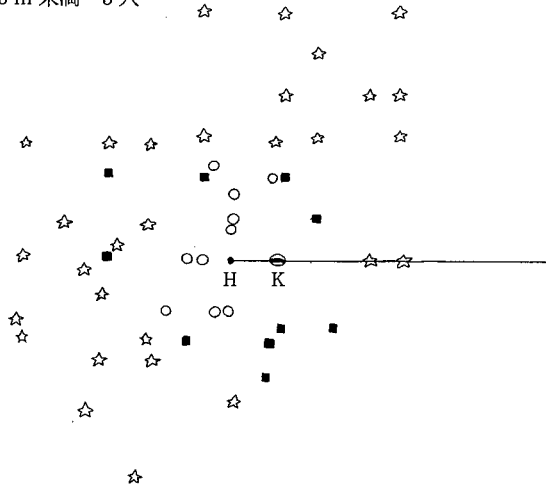


図 3-② 聞手 31 番 (ii)  
 (ii) 1 m 以上 1.5 m 未満 3 人



指示代名詞の現場指示の領域 (安部)

図 3-② 聞手 31 番 (iii)

(iii) 1.5 m 以上 2 m 未満 1 人

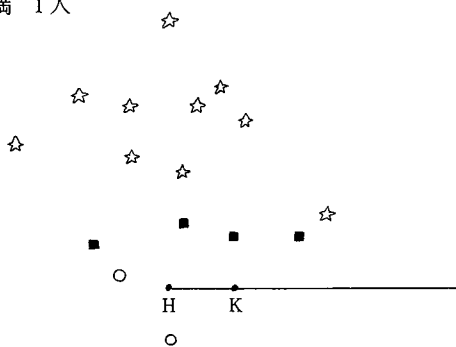


図 3-② 聞手 31 番 (iv)

(iv) 2 m 以上 2.5 m 未満 5 人

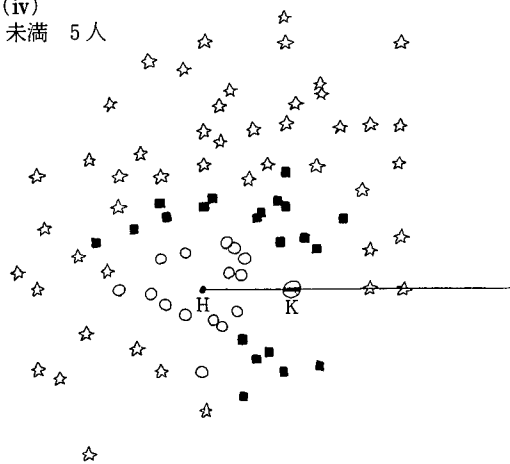




図3-② 聞手31番 (v)  
(v) 2.5 m 以上 3 m 未満 3人

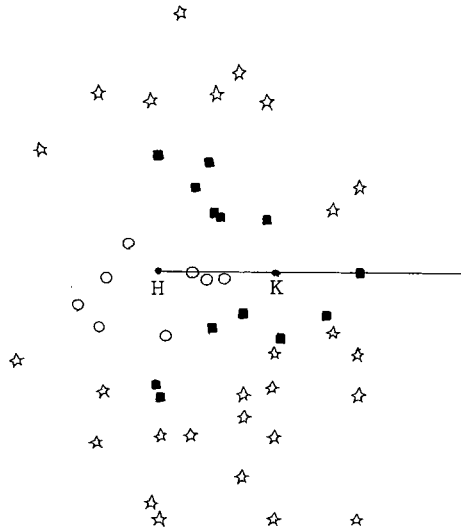
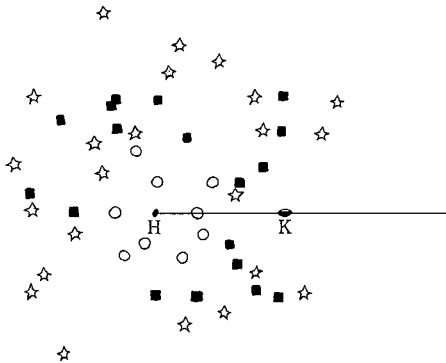


図3-② 聞手31番 (vi)  
(vi) 3 m 以上 3.5 m 未満 3人



指示代名詞の現場指示の領域 (安部)

図 3-② 聞手 31 番 (vii)

(vii) 3.5 m 以上 4 m 未満 3 人

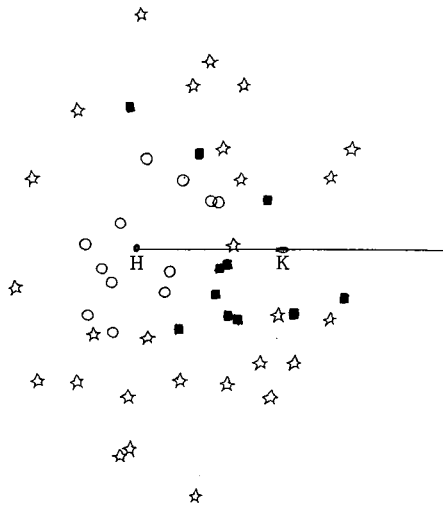


図 3-② 聞手 31 番 (viii)

(viii) 4 m 以上 4.5 m 未満 4 人

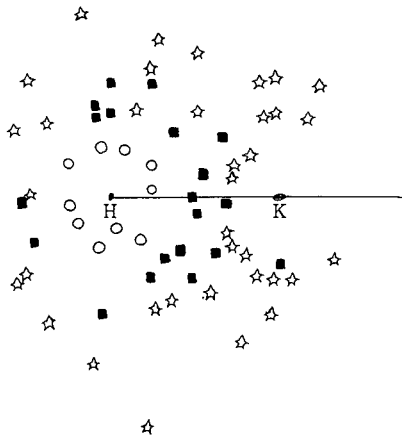


図 3-② 聞手 31 番 (ix)  
(ix) 4.5 m 以上 5 m 未満 3 人

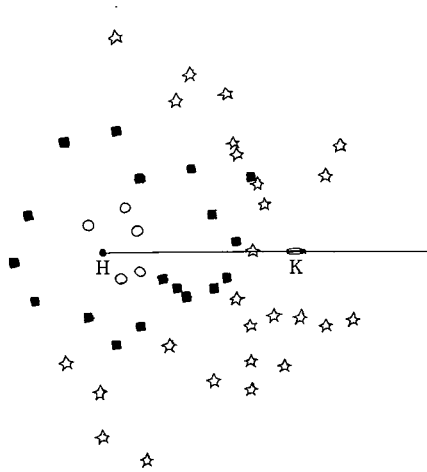
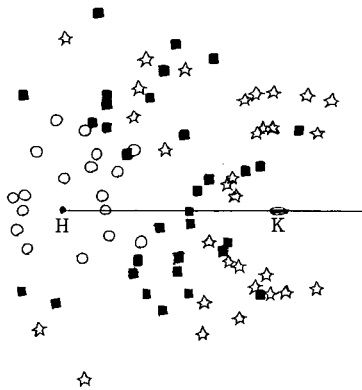


図 3-② 聞手 31 番 (x)  
(x) 5 m 以上 5.5 m 未満 5 人



指示代名詞の現場指示の領域 (安部)

図 3-② 間手 31 番 (xi)

(xi) 5.5 m 以上 6 m 未満 1 人

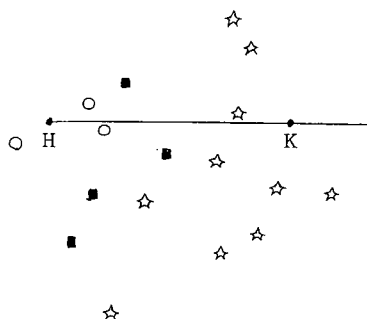


図 3-② 間手 31 番 (xii)

(xii) 6 m 以上 6.5 m 未満 4 人

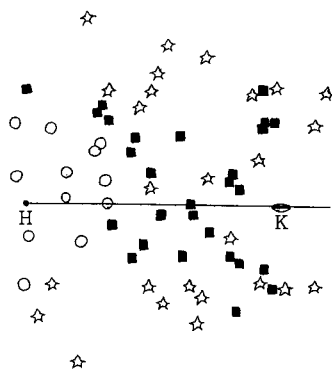
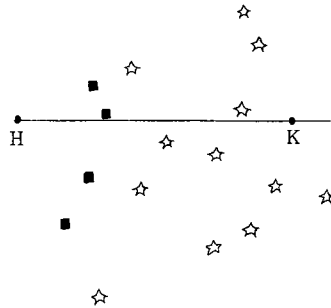


図 3-② 聞き手 31 番 (x̄m)  
(x̄m) 6.5 m 以上 7 m 未満 1 人



つかの問題点を新たに指摘した。

④それに関連して、現場指示の用法において、使用法に相違が現れ得る、注意すべき条件の相違について指摘した（2章）。

以下に、若干の補足説明をする。

①については、三章で見たように、新たに、聞き手寄りでもア系を使用する傾向が若干ながら指摘された。これについては、そのうちの一名の話者について、その使用意識を確認できた（図 3-②-（x̄m））。それによると、調査方法を誤解したのでも、また、特殊な使い分けの規準を以て回答したということでもないようであった。本人の説明を踏まえ、その意図がわかるように言葉を補って示せば、およそ次のようであった。

「聞き手（実験では院生=3-②）を執筆した吉田が担当）が、よく知っている人物なら、ソを使用したかもしれない。知っている人なら、相手を身近な存在としてより意識できるから、（相手側の領域を示す）ソで回答したのではないか、と思う。実験では、目上に当たる面識もない人であっ

たので、相手（聞き手）をあまり意識できず、そのため、相手への意識よりも、むしろ自分の規準が優先して（ア系で）回答していたように、思われる。」（福島県生育）（図3-②-(xi)の同様の事例については図解説を参照。）

前半まではある程度理解できる理由かとも思われるが、後半の、相手を身近に意識できないと自分からの距離が優先してくる（＝自分からの絶対的な距離が優先してア系となる）という感覚については、興味深いところもある。もっと事例と内省の情報を集めていく必要があると思われた。

②については、話者の視線の高さや、体の向きなど、より正確に統一的調査が可能となるような注意と手順説明が必要と考えられた。

③については、次の点について、世代差・地域差・個人差が現れてきていることになるので、特に研究者はその論文の中で自身の使用法を明示していくのが、今後の議論上、適当と思われた。

- A 聞き手に対して、話し手の側面より背後側にあるものを、ソ系でいえるかどうか。
- B 話し手と聞き手の中間にあるものを、ア系でいえるかどうか。
- C Bの中間のア系は、話し手・聞き手がどのくらい離れた場合に現れるか。
- D（話し手と聞き手とが向かいあった場で）聞き手寄りのところをア系でいえるかどうか。

因みに、本稿執筆者（安部）は、A背後にあるものにソ系は使用しにくいと感じ、側面の場合はやや迷いが生じ（当初は背後と同様使用できないと思ったのだが、何度も実験しているうちに曖昧になった――このように次第に曖昧になって迷うという院生は少なくなかった）、B中間にはアは使用できず（よってCは距離があっても現れず）、D聞き手近辺にはア系は使用しない。

④については、二章a～gに挙げた以外でも、現場指示の判断を左右する諸要素を、より全体的に、より精密に研究していく必要があると考え

る。

今回のような高橋調査法でも、今後、細部の条件などを変えて、追跡調査が必要であろう。また、現場指示でも、他の方法によって、指示代名詞の使用規準となっているさまざまな条件を明らかにしていく必要があると考える。機会を改めて検討していくことにしたい。

### 参考文献

- 佐久間鼎 1940『現代日本語の表現と語法』厚生閣  
渡辺実 1952「指示の言葉」『女子大文学』5（大阪女子大学文学会）  
高橋太郎 1956「場面と場」『国語国文』25-9（京都大学文学部国語国文学研究室）  
中央図書  
服部四郎 1961. 8「『コレ』『ソレ』と this, that.」『英語青年』107-8  
宮田幸一 1961. 11「日本語と英語の指示詞」『英語青年』107-11  
服部四郎 1968「コレ・ソレ・アレと this, that.」『英語基礎語彙の研究』三省堂  
高橋太郎・鈴木美都代 1982「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集』3  
（国立国語研究所報告 71）秀英出版  
中村祐理子 1990「現在におけるコソアドの変化についての実験的研究」『麗澤大学  
紀要』51  
高橋太郎・中村祐理子 1992. 01「1991年、わかものコソアド」『麗澤大学論叢』  
3  
金水敏・田窪行則 1992『指示詞』ひつじ書房  
久島茂 2001『《物》と《場所》の対立——知覚語彙の意味体系』くろしお出版  
久島茂 2002『《物》と《場所》の意味論——「大きい」とはどういうこと？——』  
くろしお出版  
安部清哉 2009. 3「指示代名詞のアジアにおける地理言語学的研究課題」『東洋文化  
研究』10、学習院大学東洋文化研究所

【付記】①調査は、安部の指導のもと、上原・吉田が参加して、2008年7月学習院大学日本語学講義Ⅰ（1年生履修）の補講の授業で行われた。なお、回答者から留学生・外国人を除外した。西日本の出生ないし生育者は除外せず作図されている。言語形成期にわたって西日本生育という者は大分市1名、九州内移転1名の計2名で、結果に他との大きな相違は見られない。静岡県湖西市の1名については、三一(3)―1の(xi)図で言及した。②三章の聞き手別の報告は上原和実・吉田早織（共に、学習院大学大学院博士前期課程2年）が解説とまとめを担当した。③この

指示代名詞の現場指示の領域（安部）

実験以外に、次の講義に参加した院生・学部生と行った他の試験的実験結果を踏まえている（上原・吉田の記述も同様）。学習院大学文学部 2008 年度「日本語学講義 II」（安部清哉担当）。

（日本語日本文学科 教授）